

研究課題：ヨーロッパ映画における「ヨーロッパ」
研究代表者：村田真一（外国語学部ロシア語学科）



マノエル・デ・オリヴェイラ「ブロンズ少女は過激に美しく」（ポルトガル、2009）

1. 研究の目的、背景

これまで、ヨーロッパを総合的に扱う学術的研究は、歴史研究のほか、EUの枠組みで捉えた政治経済的立場からのものが優勢であり、文化的・社会史的観点から捉えた試みはそれほど多くはない。

しかし、ヨーロッパは、民族的にも、宗教・政治体制においても、じつに多彩であり、対話と抗争の長い歴史をもっている。また、ひとつの国のなかにもさまざまな境界があり、交差する地域やグループが存在し、それぞれ異なる「ヨーロッパ」の姿が見える。それゆえ、多様性と共通性の複雑に絡み合ったこの地域を精神的・社会史的問題を比較研究する対象として捉え、「外国人」、「移民」、「ジェンダー」、「格差」など現代ヨーロッパが抱える問題を、さまざまな映画の分析を通して多面的に掘り下げていくことが、本研究の目的であった。

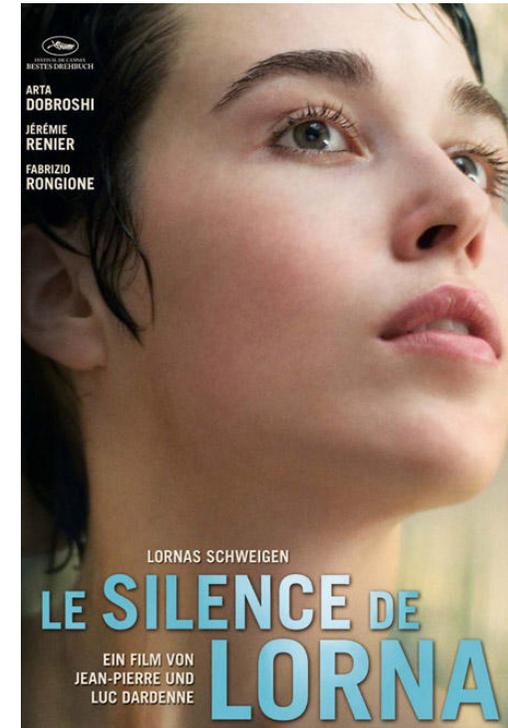
2. 研究の成果

共同研究を通して得られた研究成果は、以下のごとくである。

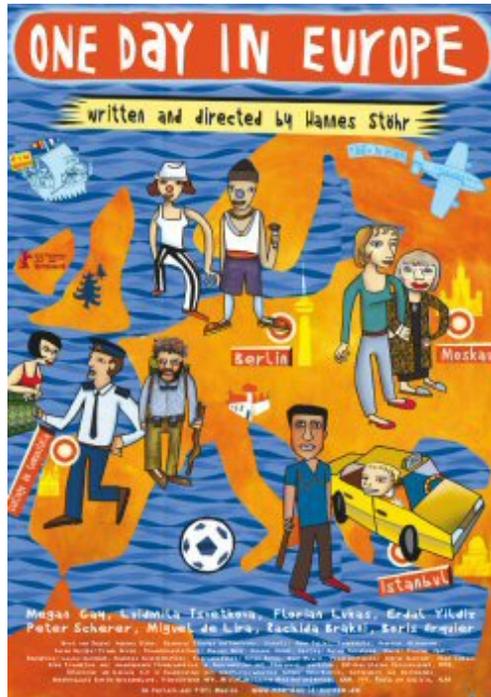
まずロシア映画に関して、タルコフスキー、ミハルコフ（ロシア）、キーラ・ムラートワ（ロシアーウクライナ）、クストリツァ（セルビア）など、1960年代から現在に至る

ロシアとスラブ諸国の映画における「ヨーロッパ」像が解明された。

次に、現代ヨーロッパ社会を蝕む深刻な問題（不法移民、失業など）とつねに深いかわりを持つベルギーのダルデンヌ兄弟の映画について、彼らの映画において、社会問題は「現実」を構成する不可避の一要素であり、そのなかで否応なしにきびしい生の選択を迫られる登場人物たちの倫理的葛藤が浮き彫りにされることがあきらかにされた。



ダルデンヌ兄弟「ロルナの祈り」（ベルギー、2009）



ハネス・シュティアー「ワン・デイ・イン・ユーロップ」(ドイツ、2005)

また現代ドイツ映画については、移民・越境などの社会問題の描かれ方が、フランス、イギリスなどとの比較によって、浮き彫りにされた。とりわけ「ドイツ人」「ヨーロッパ人」と「外国人」というテーマを表現の中核に据えるハネス・シュティアー『ワン・デイ・イン・ユーロップ』(2005年)が紹介・分析された。

さらにイギリス映画を中心に、映画制作の経済的実態、EU各国の映画公開の状況(公開本数、アメリカ映画の占める割合など)が分析され、EU加盟国の映画制作と資金提供の実際があきらかになった。

スペイン映画については、近年の映画作品に取り上げられた社会問題やテーマについて、映画作品を媒介とした、性の役割、社会的役割、美意識、理想とされる女性像や男性像の継承と変容などがたしかめられた。

イタリア映画については、現代イタリア映画における社会問題、教育問題の炙り出しをおこない、それにもとづいて、2008年にカンヌ映画祭でグランプリを受賞したマッテオ・ガッツォーニ監督『ゴモラ』、1970年代のイタリア中北部を舞台とする『ミルコのひかり』

(2005年、クリスティアーノ・ボルトーネ監督)の詳細な分析、比較検討がおこなわれた。

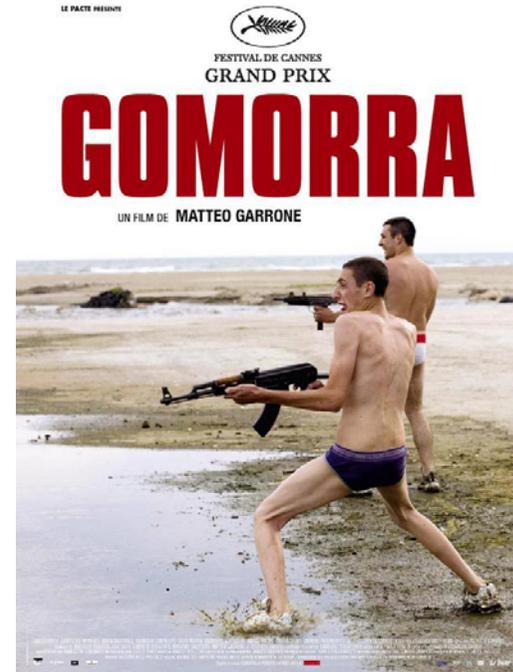
最後に、フィンランド、スウェーデン、フランス、スペイン、イタリア、ポーランド、ユーゴ

スラビア、ソビエト、ギリシアなど、ヨーロッパ諸国の作品の分析を通して、ヨー

さらに以上を踏まえ、2010年2月20日「ヨーロディエンス」と題するシンポジウムを開く他にマウロ・ネーヴェス(外国語学部(早稲田大学演劇博物館研究員)が加わり、ついで、発表をおこなった。



ショブシチ・アールパード「トルソー」(ハンガリー、2001)



マッテオ・ガッツォーニ「ゴモラ」(イタリア、2008)

ッパ映画に内在する諸特徴が確認された。に「ヨーロッパ映画の現状-芸術、市場、オいた。このシンポジウムでは、共同研究員ルトガル語学科)、マートライ・ティタニラそれぞれポルトガルとハンガリーの映画に